インクルーシブ教育システムの
柔軟な運用・工夫によるアップデート？

「インクルーシブな学校運営モデル事業」の取組とその先にあるものは何だろうか？

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻　教授　菊地　一文

持続可能な
社会の創り手の
育成

第4期
令和5年度～令和9年度

教育振興基本計画

令和5年6月16日 閣議決定

日本社会に根差した
ウェルビーイングの
向上

文部科学省

2つのコンセプト

持続可能な社会の創り手の育成

- 将来の予測が困難な時代に、未来に向けて自らが社会の創り手となり、持続可能な社会を維持・発展させていく人材を育てる
- 主体性、リーダーシップ、創造力、課題設定・解決能力、論理的思考力、表現力、チームワークなどを備えた人材の育成

日本社会に根差した ウェルビーイングの向上

- 多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるよう、教育を通じてウェルビーイングを向上
- 幸福感、学校や地域でのつながり、協働性、利他性、多様性への理解、社会貢献意識、自己肯定感、自己実現等を調和的・一体的に育む

ウェルビーイングとは

日本社会に根差した ウェルビーイングの向上

- **身体的・精神的・社会的に良い状態にあることをいい、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義などの将来にわたる持続的な幸福を含む概念。**
- **多様な個人がそれぞれ幸せや生きがいを感じるとともに、個人を取り巻く場や地域、社会が幸せや豊かさを感じられる良い状態にあることも含む包括的な概念。**

日本発・日本社会に根差したウェルビーイングの向上

日本社会に根差した ウェルビーイングの向上

日本の社会・文化的背景を踏まえ、我が国においては、自己肯定感や自己実現などの獲得的な要素と、人とのつながりや利他性、社会貢献意識などの協調的な要素を調和的・一体的に育み、日本社会に根差した「調和と協調」に基づくウェルビーイングを教育を通じて向上させていくことが求められます。

個人が獲得・達成する能力や状態に基づくウェルビーイング（獲得的要素）

- 自己肯定感
- 自己実現 など

人とのつながり・関係性に基づくウェルビーイング（協調的要素）

- 利他性
- 協働性
- 社会貢献意識 など

両者を調和ある形で一体的に向上させていくことが重要

2

文部科学省第4期教育振興基本計画リーフレットより抜粋

補足イメージ１－①

次期学習指導要領に向けた検討の基盤となる考え方

～あらゆる方策を活用し、三位一体で具現化～

主体的・対話的で
① 深い学びの実装
（Excellence）

（生きて働く「確かな知識」の習得、資質・能力育成の具体化・深化、「好き」を育み「得意」を伸ばす、情報活用能力の抜本的向上、個別最適な学び・協働的な学び 等）

② 多様性の包摂
（Equity）

（調整授業時数制度、裁量的な時間、個別の児童生徒に係る教育課程の仕組み、デジタル学習基盤を活用した学習環境デザイン、個別最適な学び・協働的な学び 等）

主に第5,7章
（授業時数の適正化・平準化、教科書の精選、構造化、裁量的な時間など様々な方策による教師・子供双方の「余白」の創出、

③ 実現可能性の確保
（Feasibility）

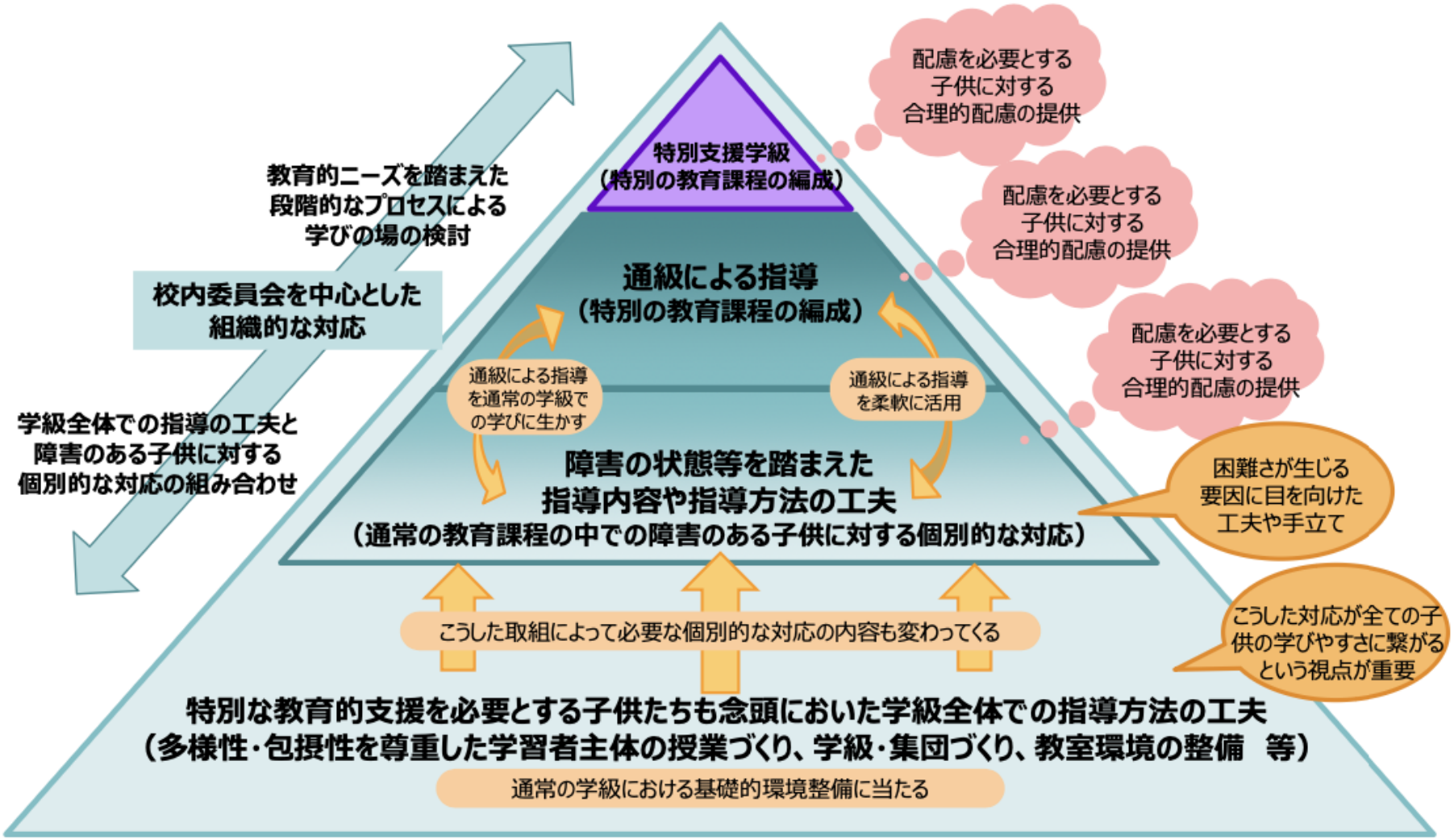
学びをデザインする高度専門職としての教師　デジタル学習基盤をはじめとする基盤整備
「裁量的な時間」をはじめ柔軟な教育課程による余白　総合的な勤務環境整備

多様な子供たちの「深い学び」を確かなものに

生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、
自らの人生を舵取りすることができる　民主的で持続可能な社会の創り手　をみんなで育む

令和7年10月9日特別支援教育WG参考資料3「教育課程企画特別部会論点整理」より抜粋

小・中学校に在籍する障害のある子供たちの学習活動の充実に向けた方策
（重層的な指導・支援のイメージ）



※特別支援学級の対象：　知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、弱視、難聴、言語障害、自閉症・情緒障害
　通級による指導の対象：言語障害、自閉症、情緒障害、弱視、難聴、学習障害、注意欠陥多動性障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱

5

令和7年11月25日特別支援教育WG資料6「第3回特別支援教育ワーキンググループの検討事項」より抜粋

このイメージモデルを「スクールクラスター」として展開するためには何が必要か

「協働的な学び」

「令和3年答申教育課程部会における審議のまとめ」より

探究的な学習や体験活動などを通じ、
子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ、多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、
様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

小学校学習指導要領（平成29年告示）第１章の第３の１の(5)，中学校学習指導要領（平成29年告示）第１章の第３の１の(5)，高等学校学習指導要領（平成30年告示）第１章第３款の１の(5)

児童（生徒）が生命の有限性や自然の大切さ、主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう、各教科（・科目）等の特質に応じた体験活動を重視し、家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるよう工夫すること。

インクルーシブな学校運営モデル事業による主なアウトプットとアウトカム

アウトプット（何をしたか）

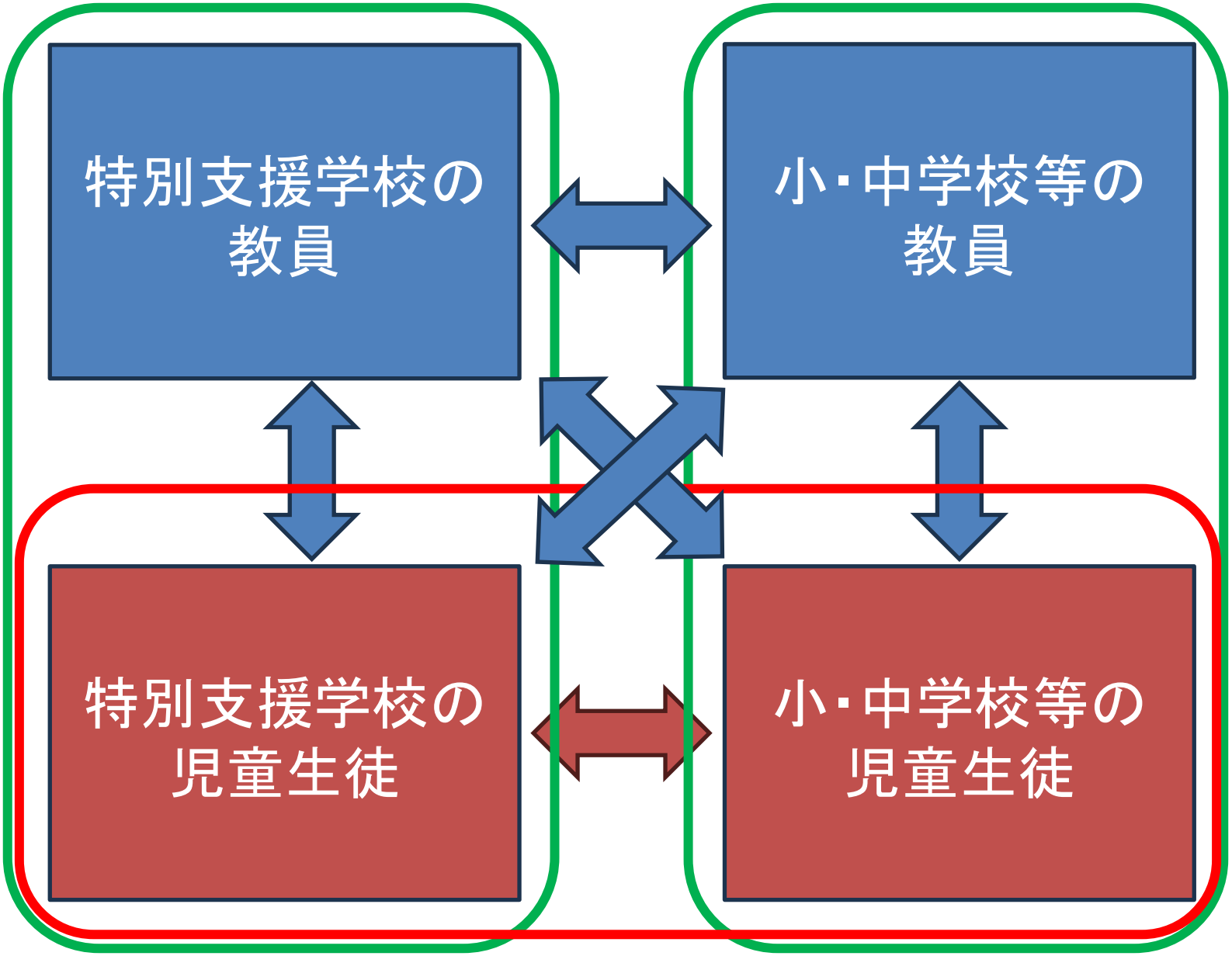
・小・中学校の空き教室の分教室的活用
・併任教員による定期的なコンサルテーション
・「つながるシート」による単元・授業デザインの検討
・Teamsを使用した日常的な打ち合わせ
・交流及び共同学習の実践の積み重ね

継続した取組の蓄積による

アウトカム（何が変わったか）

・教員や子ども同士のインフォーマルなかかわりの増加
・教員の子どもに対する見方や応じ方、授業の柔軟性
・特支教員の教科視点や小・中教員の特支視点の高まり
・児童生徒と保護者との対話、学校を超えた教師間の対話、

交流及び共同学習の推進において生じている関係



指導計画をふまえた多様な交流及び共同学習のタイプ
（長江・細渕，2005）

Ⅰ型　→単元のすべてを対象とするもの

O型　→単元のはじめとまとめの部分を対象とするもの

X型　→単元の途中を対象とするもの

Y形　→単元の開始から途中までを対象とするもの

逆Y型　→単元の途中からまとめまでを対象とするもの

交流及び共同学習の実施において、
☑授業における目標の共有、☑授業における内容の共有、
☑授業における活動の共有、☑授業における場の共有など、どこまでが可能か
「インクルーシブ教育システム」の理念や「十分な教育」をふまえつつ、実践をとおした
可能性の追求が求められる。

交流及び共同学習を推進するためのポイント

キーワードは「ポジティブ」な見方と「柔軟性」

１　教師の柔軟性
→子どもに対する肯定的かつ柔軟な見方・対応

２　安心・安全な環境
→「安心・安全」な学校、学級経営が多様性を受け入れる基盤
→ある程度のわかりやすいルールや認め合う姿勢

３　柔軟性のある指導計画
→まずはできる部分の共有からスタートし、徐々に発展させていく

４　多様なニーズや実態差に対応する魅力的なプログラム
→「豊かな活動」の中に含まれる「多様な教科の要素」
→教科における「見方・考え方」を活かせる「豊かな活動」

５　対話と連携・協働
→日常的な雑談的対話を大切にし、お互いが「自分ごと」に

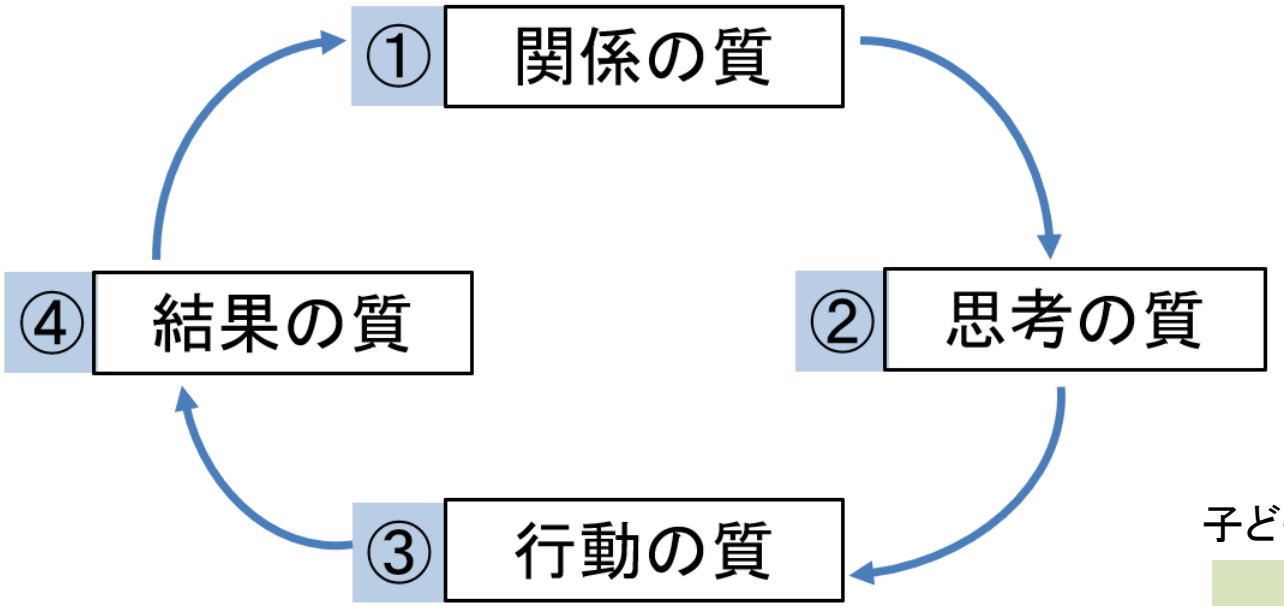
自治体全体や全国を視野に入れた発信を

・地域の歴史・伝統・文化や、これまでの取組のよさや強みを活かすとともに、様々な試行（チャレンジ）や、従前からのシステムを柔軟に運用するなどして、教育全体の発展・充実を目指してほしい。（いますぐに実現しなくても、まずは種を蒔くことが大事）

・全ての子どもは特別な存在であり、一人一人異なる多様なニーズがあるという前提に立つことが大事。そして子ども本人の願いや思いを大切にし、個人モデルから社会モデルへの転換を図ってほしい。

・これからの時代を生きていく子どもたちをみんなで育てるという意識・・・意思決定支援やセルフアドボカシーの醸成、民主主義の担い手としての子どもによる自治、・・・つまり特別なニーズを発見し特別な指導を個別に行うことに終始せず、「自分たちごと」として、学級や学校、地域という全体のあり方を問い直しよりよい方向に進めていくために「共に」議論を重ね、「共に」具現化していってほしい。

成功のコア・セオリー（Kim,2001）



以下の「悪循環」のサイクルからいかに脱却するか

①対立、押しつけや命令
②面白さや魅力の欠如、受け身の姿勢
③自発性や積極性の低下
④成果が上がらない
①関係の悪化

子ども・教師それぞれが

知り合う
↓
つながり合う
↓
学び合う

Daniel H. Kim, “What Is Organization’s Core Theory of Success?” in his *Organizing for Learning :Strategies for Knowledge Creation and Enduring Change,* Pegasus Communications pp.69-84.
佐藤善信（2011）経営学の理論は現場で役に立つのか. ビジネス＆アカウンティングレビュー7.pp1-18.

キャリア発達につながる交流及び共同学習

様々な物事を「自分ごと」として捉え
「身につけた力を社会の中で活かそうとする」ようになることを目指した取組

「キャリア教育」とは

「一人一人の①**社会的**・職業的自立に向け、
必要な②**基盤**となる能力や態度を育てることを通して、
③**キャリア発達を促す**教育」

本人にとっての意味、向き合い方の変化

「キャリア発達」とは

well-beingの協調的要素　well-beingの獲得的要素

「社会の中で**自分の役割を果たし**ながら、**自分らしい生き方を実現**していく**過程**」

キャリア教育とは、すべての教育活動をとおして「ヒト」としての有り様に影響を与えるもの

いま「ないもの」よりも
「あるもの」を活かす

教え込みできない
本人にとっての意味

大事なこと（学び）は「本人の中」にあり、経験をとおしてアップデートされていく

「意図と行動」「偶発に対する判断」
その結果の「手応え」「失敗」
「他者との関係」「感情」等のふり返り

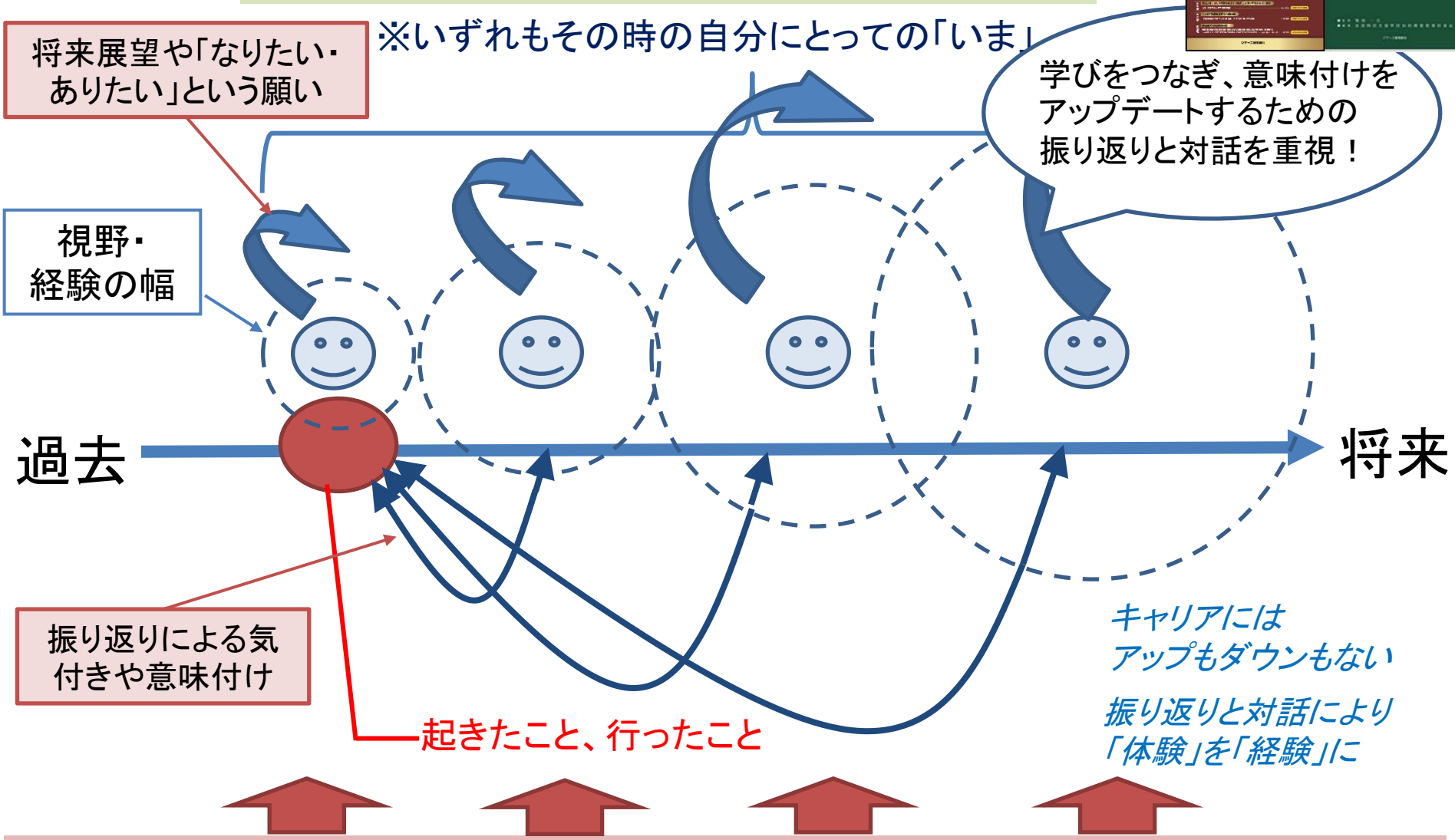
本人が思う「なりたい姿・状態」に寄与する経験を本人に語ってもらうとどうか？

児童生徒理解のための「4つの問い」（菊地，2022）によって対話を促進し「思い」に迫る。
→①状況を問う、②心情を問う、③背景（理由）を問う、④展望を問う

「省察（過程を振り返り言語化、対話する）」による学びと育ち

「ふり返り」とは後方視だけではなく、前方視するためのものでもある

※いずれもその時の自分にとっての「いま」



他者からの価値付けや友達同士の認め合い・アドバイス等、環境要因の後押しの影響が大

見方や捉え方、受け止め方の変化＝「学び」や「育ち」

feel　view,perspective

対話による「感」と「観」のアップデートで

「アリノママ」を「アタリマエ」に！